

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 台湾の日本語学科出身者キャリア意識研究のための予備的考察—インタビュー結果による実社会での決定学習ストラテジ

A Preliminary Consideration for Career Consciousness Research of Japanese Learners in University of Taiwan; From a View Point of Strategy on the Decision and Study in the Business World from the Interview Result

doi:10.29714/TKJJ.201006.0005

淡江日本論叢, (21), 2010

作者/Author：落合由治(Ochiai Yuji);林青樺(Chin-Hwa Lin)

頁數/Page：77-99

出版日期/Publication Date：2010/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.201006.0005>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



台灣日文系畢業生之職業生涯意識研究之初步考察 —從訪問結果來看現實社會中的決定性學習策略—

落合由治

淡江大學日文系教授

林青樺

淡江大學日文系助理教授

摘要

本論文針對大學的日文系畢業生之職業生涯意識，以直接訪談方式所得到的實例為基礎，探討其職業生涯意識相關之行為特徵。目前，台灣日文系畢業生在全球化之外在環境的變化之下，被要求著持有青年期之職業生涯意識。在本論文中，首先，作為日文系畢業生之職業生涯意識研究之初步考察，從4位日本語文學系畢業生的訪談資料中，分析出與第一份工作相關之經歷中的動機及行為特徵。

由本論文之分析結果可得知：從日本語文學系畢業生對於決定就職・換工作・升學等的態度，及職場上學習的態度上、可看出彼此之間在行為上的共同特徵，以及個人特有之特定行為，而這些行為特徵，與其說是心理層次或意識形態，應將其視為一種行為策略，且與日語學習有著密切關係之運用能力。

關鍵詞：職業生涯意識 外在環境 行為特徵 行為策略 日語學習

**A preliminary consideration for career consciousness
research of Japanese learners in university of Taiwan;
From a view point of strategy on the decision and study in the
business world from the interview result**

Ochiai Yuji,

Professor, Tamkang University, Taiwan

Lin, Chin-hwa,

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

In this thesis, the feature of the action that related to the career consciousness that became basic of the career consciousness consideration is studied by the interview about the career consciousness of the Japanese learners in university as the cases. An external, environmental change according to advances in globalization and a peculiar career consciousness formation to youth in that are urged on the Japanese learners of university in Taiwan now. At first as a preliminary consideration for career consciousness research of Japanese learners in university, this thesis continuously has considered the feature of the motive and the action seen in the experience concerning the first finding employment of the four Japanese learners of university.

As a result, the feature that the motive and the action are related to the attitude concerning to the decision of finding employment, changing one's job, and going on to school and concerning to the office is found. The feature of this action is a strategy of the action rather than psychology and consideration, and it can be said the operational capability deeply related also to studying Japanese.

Keywords : Career consciousness, external environment, act feature, act strategy, Japanese learning

台湾の日本語学科出身者キャリア意識研究のための
予備的考察—インタビュー結果による実社会での
決定学習ストラテジー—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

林青樺

淡江大学日本語文学科助理教授

要旨

本論文では、大学の日本語学科出身者のキャリア意識について、インタビューによる事例を基に、キャリア意識考察の基礎となるキャリア意識に関連する行動の特徴を考察した。現在、台湾の日本語学科出身者はグローバル化の進展に伴う外的環境変化と、その中で青年期特有のキャリア意識形成を迫られている。本論文では、日本語学科出身者のキャリア意識研究に関する予備的考察として、まず4名の日本語学科出身者へのインタビューから、最初の就職に関する体験に見られる動機と行動の特徴を考察した。

その結果、就職・転職・進学の決断に対する態度と、職場での学習に関する態度とには、それぞれ相互に共通する行動の特徴と、特定の個人に特有な行動とが見出された。この行動の特徴は、心理、意識というより、行動のストラテジーであり、また日本語学習にも深く関わる運用能力とも言える。

キーワード：キャリア意識 外的環境 行動特徴 行動ストラテジー
日本語学習

台湾の日本語学科出身者キャリア意識研究のための
予備的考察—インタビュー結果による実社会での
決定学習ストラテジー—

落合由治

淡江大学日本語文学科教授

林青樺

淡江大学日本語文学科助理教授

1. はじめに

現在、台湾の日本語教育は一つの転機を迎えている。その問題には外的環境変化による問題と、教育に内在する問題とがある。外的環境変化には、大きくは、グローバル化の進展と、それに伴う就職環境悪化という二つの問題がある。台湾でもグローバル化の動きは加速し、台湾の日本語学習者の主要な進路と言える経済面で見れば、たとえば經濟部は1995年から「JAPNDESK」を開設して、日本企業の誘致を拡大しようとしてきた¹。2007年当時で約1500～1800の日系企業が進出し、日本人居住者は約26000人となり、業種も半導体、電子部品など工業関係から、レストラン、教育、デパートなどのサービス業まで非常に幅広い分野に及んでいる²。業種の広がりにとともに、こうした日系企業が求める日本語人材も多様化し、台湾の日本語学習者が卒業に出会う職場環境や日本語使用場面も複雑化していると考えられる³。一方、グローバル化の影響は台湾の雇用環境にも影響を与えている。台湾では1990年代の好景気から逆転して、2000年代に入ると企業の中国大陸進出による産業空洞化や経済不況の影響で次第に失業率が増加し、大学卒業生が希望した職種に就

¹ 台湾經濟部「JAPNDESK」<http://www.japandesk.com.tw/>

² 「JAPNDESK」主要産業紹介 <http://www.japandesk.com.tw/sangyou.html>

³ 台湾での総合的な調査がないため日本での調査を紹介すると、一例として(財)海外技術者研修協会(2007)P19には日系企業での外国人留学生出身社員の問題点として「社会人としての行動という観点では、(中略)確実な「報・連・相」が求められると、日本企業の組織文化に応じた業務での基本的コミュニケーションの課題が指摘されている。

くのが困難になる状況が続いている⁴。それに伴って台湾での職業意識や就職意識に関する調査も増え、特に大学生に関する調査は2000年代に入って次第に増えている⁵。

一方、台湾の日本語教育に内在する問題としては、教育制度、カリキュラム、スタッフ、学習者、教育リソース、教授法などさまざまな側面から問題点や課題が指摘されてきている⁶。その背景には、外的環境変化に応じた経済、文化および人的交流での日本との関係拡大の動きがあると言えるであろうが、こうした中、今まで大きくは取り上げられてこなかった問題として、大学生の就職状況が困難になりつつある状況で、日本語学科を卒業した学生達（以下、日本語学科出身者とする）が卒業後にどのように自分の進路を決定し、実社会の中でそれまで学んだ日本語を活かしていくかという進路選択の課題が考えられる。日本でも台湾でも日本語教育中では日本語学習者の企業や社会でのコミュニケーション・ギャップや実社会で

⁴ 一つの参考指標として中華民國統計資訊網「臺灣地區失業者之年齡、教育程度與失業週數」http://win.dgbas.gov.tw/dgbas04/bc4/manpower/year/year_f.asp?table=62によれば、1993年の大卒以上の平均失業週数は16.89週であったが、2000年には23.98週、2007年には22.43週となり高学歴者の失業が長期化する傾向が持続している。失業率http://win.dgbas.gov.tw/dgbas04/bc4/manpower/year/year_f.asp?table=03も2001年を100とした指標で、1993年は28.53でいずれも100以下だったのに対して、2000年以降は2005、6、7年が95%前後であるのをのぞけばいずれも110前後で高い状態が続いている。

⁵ 2000年代の大学生に関するキャリア意識調査として、陳瑞蓮（2001）『日文系畢業生出路調查』中國文化大學日本研究所碩士論文、陳書偉（2007）『台灣大專畢業青年就業力之結構方程式模型分析』交通大學經營管理研究所碩士論文、劉芳好（2007）『應用外語系畢業生職業選擇決策因素階層之研究』國立雲林科技大學技術及職業教育研究所碩士班碩士論文、陳韻宇（2008）『大學畢業生學校學習經驗對其就業力之影響』交通大學經營管理研究所碩士論文、淡江大學校友服務暨資源發展處（2008）『96年度畢業生滿意度與就業概況調查報告』淡江大學などがある。

⁶ 台湾の日本語教育の課題について、近年のまとまった研究として蔡茂豊（2003）『台灣日本語教育の史的研究』大新書局は教育制度、教科書、カリキュラム、教員、中等・高等・社会教育の面から台湾の日本語教育の現状と課題を指摘している。林長河（2007）『学習者のニーズに応じる日本語教育研究—コース・デザインの理論と実践』致良出版社は主にカリキュラムの面から台湾の日本語教育、応用日本語教育の課題と対応について調査、提言を行っている。

必要とされる五技能およびコミュニケーション能力への注目は行ってきたが、こうした進路選択に関わる問題が正面から取り上げられることは少なく⁷、台湾の日本語教育にとって今後、対応すべき学習者の大きな課題の一つと言える。

本論文はこうした状況に対応するために、台湾の日本語学科出身者のキャリア意識研究に着手するための予備的考察をおこなうものである。まず、台湾の日本語学科出身者のキャリア意識について、卒業後実社会での仕事の経験のある出身者にインタビューを行い、質的方法で意識の特徴と考えられる点を示す。そして、台日の青年期のキャリア意識に関連する今までの調査と対照して、日本語学科出身者のキャリア意識を捉える際に仮説として取り上げる必要があると考えられるポイントを見出したい。

2. 日本語学科出身者のキャリア意識

以下では、日本語学科出身者のキャリア意識を探る上での試行的事例研究として、日本語学科出身者が卒業して実社会の中で経験した日本語と仕事との関係に関わる問題と、それに対する対応について、特徴と見られる点を出身者のインタビューを元に見ていくことにする⁸。

2.1 インタビュー相手とインタビューの方法

4名の日本語学科出身者のプロフィールは表1に示したとおりで

⁷ 青少年の進路・職業選択に関わる意識は、従来、教育学、社会心理学などの分野では広くキャリア意識の課題と捉えられてきたが、日本語教育の中ではほとんど注目されてこなかった。一例として600名近い発表が行われた2008年の『日本語教育学世界大会2008—第7回日本語教育国際研究大会—』では、Aグループで「多文化と日本語教育」、Bグループで「学習者の多様化と日本語教育」をテーマにした学習者の社会生活面での研究テーマが多数取り上げられているが、日本語学習者のキャリア意識に焦点を当てた研究は見られない。また、(財)交流協会が行っている台湾の日本語教育に関する諸々の調査でも日本語学習者のキャリア意識を取り上げた調査はまだ見られない。

⁸ インタビュー方法については、桜井厚(2002)『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房、谷富夫編(2008)『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社などを参照。

ある。

表 1 インタビュー相手のプロフィール

氏名	年齢	略歴	最終学歴	技能・職種
S H	35	日本語とは関係のない専門学校卒業後、就職し、その後大学の日本語文学科に入学。卒業後、日本語とは直接関係のない仕事をしている。	4年制大学日本語文学科	工学系コンピューターソフト運用技能 日本語読解力
K W	33	日本語とは関係のない専門学校卒業後、就職し、その後大学の日本語文学科に入学。卒業後会社勤務を経て、日本留学中。仕事は日本語とは関係のない仕事をしてきた。	4年制大学日本語文学科	経理・会計・出納技能 日本語読解力
R S	31	大学の中国語学科、日本語文学科卒業後、国内で進学し、修士課程を修了。会社勤務を経て、1年あまりで退職。在職中は日本語も一部使う仕事であったが、現在は求職中。	大学院日本語文学研究科修士課程	文科系修士 パソコンアプリケーション日本語運用技能
R G	30	専門学校卒業後、大学の日本語文学科に編入学して国内で進学し、修士課程を修了。日本語に関係のない会社勤務後、職業に関する研修を受けて、現在は日系企業で日本語を使う仕事をしている。	大学院日本語文学研究科修士課程	文科系修士 パソコンアプリケーション日本語運用技能 日本語専門通訳技能 秘書技能 英語運用技能

いずれも大学卒業後一定年数を経て、実社会での仕事の経験のある以上の4名に、日本語学科出身者の職業意識、キャリア意識について調査しているという調査目的を示し、プライバシーを明らかにしない形で、資料としてあるいは後輩達へのメッセージとして録音してインタビューを使わせてもらうことに同意してもらった上で、後輩達に語る言葉として話してもらった。質問の要点は以下の点である。

- ①なぜその仕事を選んだのか。
- ②その仕事で何が分かったか。
- ③大学（大学院）に入ろうとしたのはなぜか。
- ④大学（大学院）で学んだことは役に立ったか。意味があった

か。

- ⑤卒業後、仕事をするとき大学（大学院）の経験は意味があったか。

半構造化インタビューの方法であるが、後輩達に語りたい内容として経験を話してくれるように依頼している。従って、本論文での質的調査は、4名が後輩達に語りたい経験からキャリア意識形成に影響を与えた要素、要因を読み取ることだけが主目的である⁹。インタビューでは、インタビューアーは主に日本語で話し、回答者には日本語か中国語のうち話しやすい言語で話すようにしてもらった。なお、インタビューは来校時間の関係で、S Hさん、K Wさんが1組、R S君、R Gさんが1組で行っている。

2.2 インタビューの分析方法

インタビューの文字化では、言語的内容のみを文字化した¹⁰。また、文字起こしした表2、表3の言語的内容であるが、インタビューでS HとK Wは中国語で話した。言語的内容の構造を捉える質的研究ではインタビューに応えた相手の使った表現上の特徴を捉えることが重要であるため、翻訳はしないで中国語で話した内容をそのまま文字起こししている。また、R SとR Gはほとんど日本語で話したが、その言語的内容を再現する意味で、やはり文法等での間違いや単語等の脱落があってもそのまま文字起こししている。分析においては、インタビューの要点である5項目を中心に、各インタビュー相手の内容の中から共通点と相違点を取り出し、相互に比較す

⁹ 分析方法のうち質的研究についてはウヴェ・フリック／小田博志他訳（2002）『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社、GTAについては戈木クレイグヒル滋子編（2008）『質的研究方法ゼミナール増補版—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院などを参照。

¹⁰ 社会科学系の質的対象研究やGTAのような理論構築が目的の会話分析などを用いる方法では、できるだけ談話行動そのものを再現しようとして、言語的内容ばかりでなくフィラー、間、イントネーション、表情などの非言語的要素まで記述する文字化の方法もあるが、本論文の目的は理論構築目的とは異なり、異なる経歴を持つ個人が語る内容の共通性を構造して捉えようとしている。従って、言語的内容のみを文字化している。

る方法を用いた。

2.3 日本語学科出身者のキャリア体験とキャリア意識

以下、今回は、4名の日本語学科出身者へのインタビューの中から最初の仕事を選んだときの動機とその経験について話された内容を中心に上げ、その中に見られるキャリア意識形成上での課題と重要なポイントを探ることにする。

今回のインタビューのプロフィールから分かるように、R Gは専門学校、日本語学科の大学、大学院と進学し、R Sは大学の日本語学科から大学院に進学して、それぞれ仕事を始めた高学歴者である。一方、S Hは8年、K Wは5年、専門学校卒業後から仕事の経験を経て大学に進学し、また仕事に戻っている。また、R G、S Hは仕事を辞めずに続けているが、R Sは仕事を1年ほどで辞め、K Wは奨学金試験を受けた後、私費留学の道を選んで日本で大学院に進学した。

なお、今回の事例について、S KとK Wは日本語とは関係のない専門学校を出て最初の仕事を始めているので、二人の経験は日本語学科出身者のグループには入れることができないという見方も出来る。しかし、確かに二人は専門学校を出た後、キャリア・アップのために大学に入ったケースであるが、実はこうした形で大学に進学したケースは大学夜間部の日本語文学科に在学している学生では普通に見られるもので、こうしたケースを日本語学科生から除くことにはかえって問題がある。なぜなら、日本語学科生と言っても台湾の多くの大学では夜間部や社会人コースにこうしたキャリア・アップのために大学に入った学生が多数進学しており、日本語学科生と言っても昼間部の学生ばかりではないことと、日本語学科に進学してくる学生の多様性を理解したうえで、その多様な環境におかれた学生のキャリア意識において、外的環境や経歴の違いにも関わらず共通点を見出すことが、より広い学生へのキャリア教育をカバーすることに繋がるからである。

また、日本語学科出身者を含めた大学生の卒業後の進路とその後

の転職、進学状況とキャリア意識についての継続的、総合的なライフストーリー的調査はまだ台湾では行われていないため、いかなる予断もおかず、日本語学科出身者＝日本語関係の仕事と短絡せずに、本論文のような予備調査を繰り返しながら、様々なケースについて見る中で、キャリア意識の問題を捉えていく必要がある。その点では、今回の4名の最初の就職状況は、日本語学科出身者が必ずしも日本語関係の仕事に就けるとは限らない現在の台湾の就職状況を直接、間接に反映していると言え、今回のインタビューから浮かぶキャリア意識事例は多様な実態を持ち、多様な進路を取ると考えられる日本語学科出身者のキャリア意識を探る事例として取り上げて差し支えないと言える。

経験の同質性からまずSH、KWを1組にして見ると、日本語とは関係のない専門学校を出てSH、KWが日本語学科の大学に進学するまでの経過であるが、全く違う仕事に就いていたにも関わらず、二人の語っている内容は非常によく似ている。

表2 SHとKWが仕事を始めて大学に進学するまでの経過

氏名	最初の仕事を選んだ契機	職場での経験	進路変更の背景
SH	我專科畢業之後那時候去青輔會登記，①他就會幫我們介紹工作，這家公司打電話給我，我就去面試。因為在我家附近很近，所以我就。。。	可能是因為主管跟我的關係吧，②他就覺得我還滿乖的，就錄取，從頭開始教我。所以我那個時候職務是助理工程師，工作內容也是版子的LAYOUT。之後大概待了三年，因為我主管自己要外面組一個工作室，所以我就跟著他一起到外面組工作室當助理。工作內容其實也是差不多，一些文書方面的WORD，也是用AUTOCAD的畫圖。	為什麼後來會進入淡江大學，也是因為③我覺得上專科的學歷不太夠。也為什麼會進入日文系。是因為英文太爛，一劇方面是因為那時候日劇，所以就想說報考日文系。
KW	我專科畢業之後因為①學姐介紹所以來到這邊餐廳做出納的工作，在這裡做了兩年半左右，因為餐廳經營不善倒閉，所以我就要找新的工	結果我去另外一家應徵工作之前完全沒②有會計的經驗，但是那個公司的董事長教我，所以我在那邊又做了四年半五年的時間，	之後因為在那邊做的時候發現做了③三年四年之後發現，很多新來的員工都是大學生，大學生畢業的學生，那時就覺得自己的學歷不足，所

	作。		學的不夠，所以回去考大學。很幸運的考上了淡江大學的日文系，爲什麼選日文系呢，④因爲英文不會，但我覺得語言很重要，那就選日文系從頭開始。
--	----	--	---

（注）S HとK Wは中国語で話しているため、言語的内容を再現するため、そのまま文字起こししている。

二人が仕事を選んだ契機は、表2の下線①のように共に紹介してもらった仕事を素直に始めたことで、興味や関心から仕事を選んでいたわけではない。また、点線部②から分かるように職場の主任、社長が必要な仕事の専門知識と技能を教え、また2人はそれぞれその信頼に依って、順調に仕事の技能を伸ばして、安定した仕事を続けていった。しかし、二人が仕事を辞めて大学への進学に踏み切ったのは、波線部③のように学歴不足を痛感したのが契機である。S Hは具体的には説明していないが、K Wと似た状況に置かれたと見ても間違いではないであろう。K Wが述べているような台湾での近年の高学歴化が、それまで安定した仕事をしてきた二人が専門学校の学歴では不足していることを痛感させる背景になっていると見られる。そして、二人は主要には④のように英語が上手ではないからと言う消極的理由で日本語文学科への進学を決めた。

特定業務を地道にこなす堅実な職業人と言える二人のキャリア意識を特徴付けるポイントは、まず表2の①、④の言説によく現れているように思われる。つまり、転職であれ進学であれ、自分にとっての積極的意義付けや自分の嗜好からそれを選ぶのではなく、与えられたチャンスにまず従うという謙虚な姿勢である。これを「機会柔軟適応性」と呼ぶことにする。もう一つは②、③のように職場環境に合わせて新たに学習したり、環境の変化を機敏に感じ取ってキャリア・アップを企画したりする学習性の高さと反応の機敏さである。これを「状況機敏学習性」と呼ぶことにする。これらは、S Kでは8年、K Wでは5年という、かなり長期にわたる経歴から浮かぶ行動の様式であり、前者は進路決定のストラテジーと言え、後者は自分の置かれた環境への適応と対応のストラテジーと言える。

次に、高学歴者であるRSとRGが最初の仕事に就いた時について語ってくれた内容を見てみる。これも表2のSKとKWの場合と対比して整理してみると、以下の表3のように整理できた。

表3 RSとRGが大学院修了後に始めた仕事の経験

氏名	最初の仕事を選んだ契機	職場での経験	進路変更の背景
RS	もともと、大学院五年位かな、卒業しましたよね。その後はすぐ兵役して、そして仕事をつきました。仕事はもともとは私自身中国文学学科の経験がありまして、そのために、 <u>④文字に対して、興味があるんですよね、そのために編集の仕事に就きたいです。</u>	編集と言う仕事は、僕に対しては色々な面白い経験もあるし、 <u>⑧もちろん苦しみの経験もありま</u> す。例えば残業のこととか、或いは今の不況の状況の中で、出版業界はもともとその・・・ 先生：不況の影響たくさん受けたから、仕事の環境も厳しかった？ 学生：そうですね、残業も多いし、そういう経験は私に対しては貴重な経験になりますよね。 <u>⑧誰も残業したくないよ。だけど、新入社員だから、残業しなければいけません。</u> 夜の十二時くらい、十一時くらい残業した経験もありますし、徹夜することもあります。直接会社に住んで、そして、仕事をして、というような経験もあります。 ===== 学生：学校はそもそも学生さんを守つてと言うような環境ですよ。言い換えれば、 <u>⑧②社会と言う環境はその、いろんな人が共有環境を作って、別に人を守る環境ではない。競争し合いというような環境ですよ。そのために、実力が必要です。実力のほかには、人間と人間の間関係ということもとても重要です。だが、学校はそうではない。</u> 学校はもし一人の学生さんが自分の成績のために、一日中で図書館で毎日勉強すれば、自分のことばかりやっていれば、	仕事をやめるきっかけはやっぱし <u>⑩自分に対して、もっと希望があるんですから。</u> 先生：例えばどんな希望がありましたか。 学生：例えば <u>⑩もっとコミュニケーションのできる仕事。</u> 先生：やってみて、やはりもっと人と接触する仕事のほうがいい。 学生：はい。ただの通訳だけではない。もし、 <u>⑩人間と人間のコミュニケーションとか、会社と会社とコミュニケーションとか、もし自分がそういうような仕事ができれば、もっと自分も成長することもできますし、いい経験にもなれます。</u> その後、もしチャンスがありましたら、自分がほかの仕事をするときには、或いは新しい仕事をするときにはこういうような経験もプラスになります。と言うような関係で仕事をやめました。 先生：これから留学試験も受けるけど、留学にはどんな機会がありますか。 学生：今後との気持ちは、大学院の気持ちで調度同じなところがあるんですよ。例えば、 <u>⑩日本に留学して、特別な人と出会って、なんかいい経験にもなるんじゃないかな。</u> 別に就職の考えはあまりないですよ。それは本音です。実は日本での暮らしとか、色々な人

		<p>その成績がよいかもしれませんが、人間関係の部分はちょっと弱いすよね。そういう状況ですよね。だが、社会はそうではない。②自分のことばかりやってはいけません。チームワークが必要だし、だからチームワークこの部分は学校では特に強調しないような感じがする。</p>	<p>との出会いとか体験して見たいです。それは遊びでもない、観光でもない、それは本当の日本での暮らしがそういうような体験がしたいんですよね。</p>
R G	<p>最初はコンピューター関係の仕事は④両親の友達の会社だから、で、今まで仕事の経験もなかったので、じゃ、④とりあえずこの会社で、一般常識とか、一般のコンピューター関係のものも勉強したい。だからこの会社に入りました。</p>	<p>困ったことはその会社に入ったときの仕事は日本語に全然関係なかった。新入社員としても、社会人としても、何も分からない状態です。だから②ゼロから勉強しなくてはいいです。いいことと言うのは、今まで学校で全部、ほとんど日本語で勉強してきたので、日本語以外の知識はまったくなかった。でも、その会社ではじめて、②コンピューター関係・・・こういうものなのか、あと、②色々プロセスの勉強とか、あるいは②書類の作成とまとめ能力も少し身に着けてきました。</p>	<p>最初はコンピューター関係の会社だけど、先ほど言ったように、両親の友達の会社で、でもその会社で日本語一度も使ったことないし、④自分は大大学院までも十年間以上日本語勉強したけど、社会人として会社に出て日本語使っていないのは、自分もすごく残念だと思って、もう一つの要素は、そのとき③営業の仕事もしてきたし、営業と言うのはやはり接待とか。接待のほうは個人としてはちょっと苦手だし、お酒飲んだりするとか、本当に苦手です。だから、一年半このコンピューター関係の会社勤めてから、④やっぱり日本語をちゃんと使える仕事にしたい。でも、次の液晶パネルの仕事は見つかる前にこのコンピューター関係の会社をまず辞めて、④インターネットで色々探したりして、3ヶ月くらい探してきました。その後、液晶パネルは一応契約社員だけど、しかし一年半の間に日本に行ったり、或いは台南とか、出張に行ったり、又日系企業の文化も勉強になったりして、体験もできました。その一年半の仕事は主に、この台湾の会社は日本にある企業と提携して、技術提携という形で一年半は全部通訳として勤めました。</p>

(注) R S と R G は日本語で話したが、言語的内容を再現するため、日本語

として間違いや脱落があると考えられるところも、そのまま文字起こししている。

R Gが最初の仕事について理由には、S HとK Wのように「両親の友達の会社」でチャンスを与えられたからという状況に素直に従う要素と、下線部Ⅱ「一般常識とか、一般のコンピューター関係のものも勉強したい」という目標あるいは期待の要素とが共に見られる。R GにはS HとK Wのようにチャンスを与えられたから従うという「機会柔軟適応性」と同時に、身につけたい技術や経験に関する具体的目標や期待を同時に実現したいという目標設定があり、これを「技能目標確立性」と呼ぶことにする。一方、R Sは、S HとK Wのようにチャンスを与えられたから従うという「機会柔軟適応性」でも、R Gのような「技能目標確立性」とも異なる、下線部④「文字に対」する「興味がある」ので「編集の仕事に就きたい」という、自分の好きな仕事を選びたいという自己の嗜好性で仕事を決めている。これを「自己嗜好尊重性」と呼ぶことにする。

次に、職場での経験であるが、R S、R Gともに、点線部②のようなS HとK Wにも見られた、状況に合わせて新たに学習し、職場から柔軟に何かを学び取る「状況機敏学習性」が見られる。ただ、R Sは下線部⑤の長時間「残業」、「競争」、「人間関係」の軋轢のように、習得すべき技能などではなく、苦痛の経験あるいはストレスとして甘受するしかなかったと思われる体験も同時に語っている。これは忍耐すべき受動的体験として「状況忍耐甘受性」と呼ぶことにする。

最後の進路変更の背景を見ると、R Gには波線部③のように「接待」が苦手な自分の限界を知る経験があり、S HとK Wが現在の学歴の限界を知って大学への進学を決めたのと同じく似ている。これは「状況機敏学習性」と言える。しかし、そればかりではなく波線部Ⅲのように「日本語使っていないのは、自分もすごく残念だ」という強い未成就感があり、それが波線部Ⅲの「やっぱり日本語をちゃんと使える仕事にしたい」ので「このコンピューター関係の会社をまず

辞めて、インターネットで色々探したりして、3か月くらい探してきました」という転職活動を起こさせ、日本語とコンピューター関係での仕事の経験とを同時に活かせる日本語通訳の仕事を見つけている。波線部Ⅲのような積極的で明確な目的を持った転職願望は、S HとK Wのように職場環境の変化を感じ取って進学の必要を認める「状況機敏学習性」に対して、自分の能力を活かし職場での目標を実現させようとする行動を引き起こすという意味で「所有技能実現性」と呼ぶことにする。R Gが最初の就職を決め際にとっていた「技能目標確立性」の態度と似ているが、「技能目標確立性」は自分にはない能力を職場で新たに身につけようとする態度であるのに対して、「所有技能実現性」は現在自分の内にある能力を新しい職場で活かしたい、試したいとする自己実現的態度である。そして、R Gは波線部Ⅲのように積極的な就職活動を行って、自分の目標に合う就職先を決定した。これは、S HとK Wのように機会に従う「機会柔軟適応性」とは異なり、自発的積極的に様々な求職活動で、より目的に合った就職機会を見付け出そうとする探索的行動であり「転職願望実現性」と呼ぶ。

一方、R Sは波線部㉠「コミュニケーションとか、もし自分がそういうような仕事できれば、もっと自分も成長することもできます」という理由で仕事を辞め、また、枠囲い㉡「日本に留学して、特別な人と出会って、なんかいい経験にもなるんじゃないかな」という理由で留学の希望を述べている。㉠、㉡には今と異なる環境に行って「自分も成長」したい、「いい経験にもなる」という新しい環境に自己を成長させたり充実させたりするチャンスを願う強い意欲が込められている。これを「自己充実実現性」と呼ぶことにする。

3. キャリア意識に関わる動機・行動の特徴

以上、今回の4人の事例から浮かぶキャリア意識に関わる動機と行動の特徴を抽出してきた。

3.1 進路決定と職場の現実に対する態度

以上の内容から、まず、最初の就職先を決める場合に見出される自己の進路を決める態度の特徴を以下の表4にまとめた。

表4 最初の進路決定に関わる態度の特徴

特徴	説明
機会柔軟適応性	仕事であれ進学であれ、自分にとっての積極的意義付けや自分の嗜好からそれを選ぶのではなく、与えられたチャンスにまず従うという謙虚な姿勢で進路決定に対応する
技能目標確立性	身につけたい技術や経験に関する具体的目標や期待を同時に実現したいという目標設定があって進路決定に対応する
自己嗜好尊重性	自分の好きな仕事を選びたいという自己の嗜好性で進路決定に対応する

次に、最初の仕事の中で、次の進学、転職の進路を決める際の動機と行動の特徴を表5にまとめた。

表5 キャリア・アップに関わる態度の特徴

特徴	説明
機会柔軟適応性	転職であれ進学であれ、自分にとっての積極的意義付けや自分の嗜好からそれを選ぶのではなく、与えられたチャンスにまず従うという謙虚な姿勢で進路決定に対応する
所有技能実現性	自分が現在持つ能力を活かし新しい職場で目標を実現させようとする行動を引き起こす自己実現的なキャリア・アップの願望と態度
転職願望実現性	積極的で具体的な転職願望によって具体的計画的にチャンスを探求して進路決定に対応する
自己充実実現性	今はまだない自己の成長や充実を可能にするチャンスを新しい環境に求めることで進路決定に対応する

これらは、キャリアの決定に関わる態度と考えられる。

さらに、職場で出会った現実に対して対応する態度を、以下の表6にまとめた。これは、就職先の現実の中で、どうそれに対応したかという適応と学習に関わる態度の特徴である。

表 6 職場の現実に対する態度の特徴

特徴	説明
状況機敏学習性	状況に合わせて新たに学習したり、環境の変化を機敏に感じ取ってキャリア・アップを企画したりする高い学習性を備えて対応する
状況忍耐甘受性	現実を苦痛の経験あるいはストレスとして甘受するしかない、忍耐すべき受動的体験と受け入れる

こうした態度の特徴は、長ければ数年間に渡るような自分の職業経験を要約して語ったときに初めて見出されるような指標である。従って、どう感じているか、どう思っているかという主観的特徴ではなく、ある動機によりどう行動したかという動機を伴った行動類型あるいは行動様式の集約と言える。また、これらは本人が今までのかんりの時間を過ごしてきた自己のさまざまな経験を取捨選択して、大切な点を自分にどう関係付けたか、またどう意味付けたかによって見出される、自己了解的な行動類型と言える。その点で、これらは職業生活での一種の行動ストラテジーと言えるであろう。

3.2 成功したキャリア・ストラテジー

以上をキャリア意識での行動ストラテジーとして見た場合、今回の4人の事例から言える成功したキャリア・ストラテジーは、職業人として生活する最初の仕事を選ぶ場合は「機会柔軟適応性」が基本になるということである。素直に与えられた就職のチャンスに従ったことでSH、KW、RGはまったく未知の分野ではあっても、その後の自分の職業人生に必要な技能、知識を学んだ。この職業体験がなければ、SH、KWは進学、RGは日本語技能を活かした専門職という次のステップ・アップも可能にはならなかった。つまり何かの技能を学びたい「技能目標確立性」や自分にとっての意義「自己嗜好尊重性」はキャリアの開始時点では付随的なものにすぎず、「機会柔軟適応性」のストラテジーがその後の仕事のチャンスを作るということである。

もうひとつ、職業人として大切なことは「状況機敏学習性」による行動で、職場環境で職業関連の技能、態度、知識を適確に、また柔軟に身につけるということである。SH、KW、RGはまったく未知の分野ではあっても、その中で、専門知識や職場の知識を具体的に修得し、その後の自分の職業人としての基盤を形成した。RSの場合も、「人間関係」「チームワーク」のような漠然とした経験に止まってはいるが、やはり学生生活とは異なる職業生活の環境の特徴を理解して、大切な経験を学んでいる。

最後に、次のステップ・アップを成功させるために大切なことは、RGのような「所有技能実現性」「転職願望実現性」で行動するということである。SH、KWは日本語文学科に進学して卒業したが、結局、日本語に自信が持てず、特に会話力に自信がないため、結局、日本語を使わないで、以前と同じ職種に戻ってしまった。より待遇のよい日系企業で日本語を活かした仕事をするには、RGのように「所有技能実現性」で自分の現在の能力を評価して日本語能力や必要技能の向上を目指しながら、「転職願望実現性」によって意思決定して具体的に行動しなくてはならない。結局、KWは日本語能力を活かした仕事に就くため、日本語力を職場に相応しいレベルに上げられるように再度、留学する道を選んだ。SHも外国語塾で日本語会話を再訓練し、日系企業での業務ができるようにしたいと語っている。一方、「自己充実実現性」で行動しているRSはその後、再就職したが、「状況機敏学習性」による行動が新しい職場で取れず、すぐに退職してしまった。やはり新しい職場環境での慣れない業務のストレスに耐えるには「所有技能実現性」「転職願望実現性」を伴う必要があるように思われる。

以上、最初の就職の部分の決定と学習の戦略は日本語とは関係のない仕事の中での態度であり、日本語学科出身者に限らず職業に就いた場合は誰にでも見られる適応の戦略と考えられるが、次のステップ・アップの部分では、日本語学科出身者の専門技能である日本語能力や日本に関する知識が大きな影響力を持つ

ようになってくる。今回の事例からは、日本語学科出身者のキャリア意識を考える場合、広く職業人一般に共通する生活、人生への態度の側面と、日本語と日本に関係の深い職業・進学に関わる態度の側面という二面から捉える必要があること、また最初の定職から次のステップ・アップへという段階性を視野に入れる必要があることが分かる。

3.3 今回の調査から浮かぶ仮説

以上、日本語学科出身者を取り巻く外的環境の変化と青年期のキャリア意識の特徴を概観し、日本語学科出身者の具体的事例について見てきた。今回の予備的調査の事例から分かったことから、今後の調査に繋がる仮説的ポイントをまとめてみると、以下のようになるであろう。

第1に、近年の台湾の日本語学科出身者への調査として2001年に日本語学科を中心に行われたキャリア関係調査である陳瑞蓮(2001)¹¹と比較して見ると、グローバル化の進展とも関係して、R Gのように日系企業で日本語力を活かした仕事をするためには、在学中から読解、作文、会話、聴力および翻訳の5技能をバランスよく運用できるように訓練することが大切と考えられる。しかし同時に、どんな仕事でも通用できる職業技能や職場のマナーの習得あるいは特定の現場での専門知識という職業に関する基礎と応用の知識について在学中から見通しをもっておくことは、未知の職業環境に初めて出合ったとき無理なく対応する準備として必要と言える。これは今までの調査でも言われてきたことではあるが、今回の調査からも、日本語学科出身者のキャリア意識を調べる場合、専門の側面と職業一般の側面の二面から知識、技能およびそれに対する習得の調査を行う必要があることが分かる。

第2に、今までの調査では注目されていなかった点として、日本語学科出身者の外的状況である台湾のグローバル化の進展により、

¹¹陳瑞蓮(2001)『日文系畢業生出路調查』中國文化大學日本研究所碩士論文

今回の事例から見ると最初の就職よりも、ステップ・アップを目指す場合にむしろ日系企業や日本語関連の仕事に大きな関わりが出てくるのではないと言える。R Gのように、職業経験がない日本語学科出身者が日本語を活かした仕事をするとき、まず何らかの台湾国内の職場でまず職業経験と特定分野の知識を積み、その上で日本語力を強化しながら日本語力を活かした仕事を探すのはキャリア形成上無理の少ない、また自分の能力を多面的に伸ばしながら人生設計をすることができる方向ではないかと考えられる。その点では、日本語学科出身者のキャリア意識を明らかにする場合、一般的職業技習得能から日本語力を活かした職業へ、日本語とは関係のない仕事から日本語を生かした仕事へという段階性を踏まえる必要があると言える。

第3に、インタビュー事例で分かった日本語学科出身者の「機会柔軟適応性」と「状況機敏学習性」、およびステップ・アップで大切な「所有技能実現性」と「転職願望実現性」による決定と行動の姿の重要性である。これは、先に述べたように、日本語学科出身者の成功したキャリア・ストラテジーというばかりではなく、大学生のキャリア意識の今後の台日比較にも繋がる結果である。最近の大規模な日本の大学生へのキャリア意識調査である京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会(2008)(以下、京都大学・電通育英会(2008))¹²と今回の日本語学科出身者のキャリア体験の事例とを比べてみると、両者の共通点としてキャリア意識は、心理や動機という内面のみを捉えるのではなく、ある動機、目標をどう実際の行動に移しているかという日常生活の行動の仕方から捉える必要があり、また決定と学習に関わる具体的行動のストラテジーとして捉える必要があるということが分かる。また、京都大学・電通育英会(2008)では自分の将来像に関する「理解・実行」型学生が大

¹² 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会(2008)『大学生のキャリア意識調査 2007 調査報告書』http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa_report2007.pdf

学生生活を専門や技能の勉強を中心にして各種の活動を進路に結びつくようにデザインして行動していることが報告されている¹³が、これはインタビュー事例で分かった日本語学科出身者の「機会柔軟適応性」と「状況機敏学習性」、およびステップ・アップで大切な「所有技能実現性」と「転職願望実現性」による決定と行動の姿と共通しており、台日の青年での成功するキャリア意識の指標がそこから浮かんでくる。以上の点から、意識と行動ストラテジーへの注目と、大学生のキャリア意識に関する台日の比較研究を視野に入れる必要がある。

4. おわりに

以上、今回取り上げた事例は、日本語学科出身者のキャリア意識の問題が単に大学で進路指導をして順調に就職先を確保するという次元に止まらず、台湾社会で職業人として生きるための日本語能力と行動力、およびそれを支える各種の行動能力としての多面的な「リテラシー」¹⁴を照射していることを示している。今後さらに質的調査事例を増やし、量的調査も取り入れながら、キャリア意識の側面から日本語学科出身者のキャリア意識と日本語力、各種リテラシーとの関わりについて考察する中で、現在の日本語学科出身者が現実に対応できるキャリア意識形成に実際の日本語学科のカリキュラムが役立つような提言を目指していきたい。

¹³ 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会（2008）『大学生のキャリア意識調査 2007 調査報告書』http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/files/research/report/chosa_report2007.pdf P13

¹⁴ 「文化リテラシー」と「学習者主体」については一例として西口光一編著（2005）、佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・瀬川波都季（2007）、小川貴士編著（2007）参照。多言語・多文化社会の言語、文化などに関わるリテラシーについては多様な議論があり、本論では、台湾の高等教育での日本語教育の課題の一つを示す意味で、「社会文化的リテラシー」を独自に定義した。

主要参考文献

- ウヴェ・フリック／小田博志他訳（2002）『質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論』春秋社
- （財）海外技術者研修協会（2007）「平成 18 年度構造変化に対応した雇用システムに関する調査研究」<http://www.meti.go.jp/press/20070514001/gaikokujinryugakusei-hontai.pdf>（2010 年 5 月閲覧）
- 京都大学高等教育研究開発推進センター・財団法人電通育英会（2008）『大学生のキャリア意識調査 2007 調査報告書』http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/Files/research/report/c_hosa_report2007.pdf（2010 年 5 月閲覧）
- 経済産業省（2004）「外国人労働者問題—課題の分析と望ましい受入制度の在り方について」<http://www.rieti.go.jp/jp/events/bbl/bbl051006.pdf>（2010 年 5 月閲覧）
- 戈木クレイグ・ヒル・滋子編（2008）『質的研究方法ゼミナール増補版—グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院
- 蔡茂豊（2003）『台湾日本語教育の史的研究』大新書局
- 桜井厚（2002）『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・瀬川波都季（2007）『変貌する言語教育—多言語・多文化社会のリテラシーズとは何か』くろしお出版
- 社会実状データ図録（2008）<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/3820.html>（2010 年 5 月閲覧）
- 谷富夫編（2008）『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社
- 淡江大学校友服務暨資源發展處（2008）『96 年度畢業生滿意度與就業概況調查報告』淡江大學
- 因京子（2008）「社会文化技能を育てる教材の開発に向けて」『台湾日本語文学報』24 台湾日本語文学会
- 中華民國統計資訊網「臺灣地區失業者之年齡、教育程度與失業週數」http://win.dgbas.gov.tw/dgbas04/bc4/manpower/year/year_f.asp?table=62（2010 年 5 月閲覧）

- 陳韻宇 (2008)『大學畢業生學校學習經驗對其就業力之影響』交通大學經營管理研究所碩士論文
- 陳書偉 (2007)『台灣大專畢業青年就業力之結構方程式模型分析』交通大學經營管理研究所碩士論文
- 陳瑞蓮 (2001)『日文系畢業生出路調查』中國文化大學日本研究所碩士論文
- 西口光一編著 (2005)『文化と歴史の中の学習と学習者—日本語教育における社会文化的パースペクティブ』凡人社
- 劉芳妤 (2007)『應用外語系畢業生職業選擇決策因素階層之研究』國立雲林科技大學技術及職業教育研究所碩士班碩士論文
- 林長河 (2007)『学習者のニーズに応じる日本語教育研究—コース・デザインの理論と実践』致良出版社

この論文は、98 學年度淡江大學外國語文學部日本語文學系整合型研究計画『大學教育培育日語學習者之相關研究』のサブ研究計画および 98 年度國家科學委員會專題研究計畫 98-2410-H-032-069-に基づく研究成果である。